

●二人で味わう古典和歌(67)

よしさらばつらさは我にならひけり頼めて来ぬは誰か教へし

清少納言

『詞花和歌集』巻九「雑」の一首。

「ええ、ええ、わかりました。それならば、あなたのつれなさはわたしに学んだものなのでしょう。では、あてにさせておいて来ないというのは、いったい誰が教えたのかしら」。

詞書には、こう記されている。

「行くよと期待させておいて、約束の夜来なかつた男が、しばらくしてやって来たが、出て逢うこともしなかつた。すると、つれなくするのはあなたに学んだんですよ、などと言ってきたので詠んだ」。

〈ああ言えばこう言う〉二人は、むかしからいたのである。それどころか、こうした恋歌のやりとりこそが、〈ああ言えばこう言う〉文化を育んできたのだ。

まるで日常会話の続きのような「よしさらば」は、当時

あまのこころ

の慣用表現。不満ながらも一応「そうよね」と受け入れたふうに見せかけて、ここから反撃に出る。互いに恋歌のかけひきを通して、相手の教養や人間性をおしはかる。こういうの、清少納言は得意そうだなあ。

清少納言はもともと歌の家系の人である。『百人一首』には、祖父・清原深養父、父・清原元輔、清少納言と三代の歌が残されている。

夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを雲のいづこに月やどるらむ 深養父

ちぎりきなかたみに袖をしほりつつ末の松山波こさじとは 元輔

夜をこめて鳥のそらねははかるともよに逢坂の関はゆるさじ 清少納言

こうして並べてみると、祖父や父に比べ、清少納言はやはり機知の歌びとであったようだ。

そのせいにか、『定家八代抄』などでは「恋」に収録されている「よしさらば」の歌、『詞花和歌集』では「雑」に分類されている。(小島ゆかり)